

JUNG-ADLER-COVEY 型ビジネスリーダーシップモデル から学ぶ留学奨学金応募者向けワークショップデザイン

鈴木雅久

Workshop design for essay writing and interview preparation of study-abroad scholarship application, learning from business-type leadership competencies of JUNG-ADLER-COVEY models

The Japanese government has promoted study-abroad of Japanese nationals for the last decade, while not small number of scholarship assessors and interviewers believe that Japanese students are too modest and poor in essay writing and interview for scholarship application to study-abroad. The study finds that Japanese students have not enough time and opportunities to make clear pictures of life-long plan and future goals throughout their detailed plan of study-abroad, besides their teachers and counselors provide not essential supports but more technical in these preparations. Comparison analyses also apply to Japanese students' weakness to leadership and motivation models of JUNG, ADLER and COVEY in this project. It resulted in effective teaching methodology with statement exercise by team to improve Japanese students' presentation skills and level of decisiveness in essay writing. It also found that comprehensive thinking and statement exercise are the key elements of mindset-training for Japanese students to picture their future image of success with clear wording.

Keywords: essay-writing, mindset-training, EQ competencies, leaderships, motivation models

1. はじめに

今回、本論文で取り上げる内容は、日本の国際化・グローバル化を牽引する日本人の海外留学促進についてである。日本政府は、「日本再興戦略」（平成25年6月14日閣議決定）を踏まえ、2014年度より「日本人の海外留学促進事業」を開始して、意欲と能力のある若者に留学機会を実現する企画事業を始めている。そこでの課題は、日本人の海外留学は、大学などの高等教育機関に所属するときに交換留学や語学留学などにいく、いわゆる「短期留学」とよばれるものには、多くの理系学生（約7割）が占めているのに対して、学位取得を目指す正規留学の場合は9割の文系学生が占めていることである。その傾向を克服するべく、財務省や経産省は文部科学省と連携して理工系人材の海外留学を促進しようとしているが、政府の奨学金獲得状況から見ても、なかなかその偏重は改善されない。その原因を究明してみると、理系学生が留学する場合は、理系専門分野の勉強に加え、文系と同じレベルの英語能力を要求されるなど両立が求められているところの要因が多いことが伺えるが、文部科学省の関係者によれば、財務省が理系学生に対する語学要件の緩和に反対であるとのことであった。

次に課題とされるのが、文系・理系に関わらず、日本人の留学計画時あるいは奨学金応募時に執筆する「留学計画書」や「奨学金応募理由書」のレベルの低さである。これを海外の大学で留学生の応募を多く受ける大学教授や、奨学金審査経験者などの熟練経験者からすると、日本人の応募者の「留学計画書」や「奨学金応募理由書」は

他国からの応募者と比較して、平均的に内容が薄く説得力に乏しい印象が奨学金審査経験者の間でかねてからあった。しかし、通常、留学計画や奨学金選考の申請内容は、どの団体も非公開の扱いとであるため、実態調査あるいは資料公表に至るのは難しい。

そこで、このプロジェクトでは、奨学金審査経験者を長年経験した大学教授・高校教員と、日本企業における就職面談や企業研修を担当してきた企業人事経験者やキャリアコンサルタント・EQ コンサルタントで奨学金審査に関わったことがある有志が結成したチームが、2018～2020 年度の文部科学省委託事業「日本人の海外留学促進事業」で開催された海外留学志望者向けの留学準備 One-day Workshop「グローバルな海外留学を考える集中ワークショップ（学部留学向け、大学院留学向け・留学指導担当教職員向け）」を担当する機会を得た際に、実際に留学志望をしている生徒や学生の参加協力、ならびに、留学の相談・指導をしている現場の教職員や地方自治体の教育委員会などの参加協力により、留学応募者の実態に近いデータが集める機会を得ることができたため、今回は、その Workshop を通じて得られるデータ分析から、留学計画時あるいは奨学金応募時の小論文執筆と面接における課題分析と質の向上に資するカリキュラムの策定を試みることにした。

2. 日本人学生の小論文執筆・面接の問題点

2.1 奨学金審査経験者からの問題分析

今回の作業チームのメンバーは、留学計画あるいは奨学金の書類審査と面接審査を通じて知り合った奨学金審査経験者（以下、奨学金審査経験者）が長年感じていた日本人の留学奨学金応募者の短所についての意見交換が発端となり、その聞き取り調査をしたコメントをまとめたものが表 1.1 に記されている。

表 1.1 日本人の奨学金応募者の短所に関する奨学金審査経験者のアンケート

(1) 自分の留学計画に自信が無さそう。	(10) 志望分野を志望先で留学することで、応募者の現在と将来で何が変わるのか分からない。
(2) 留学をしたいという大枠以外、留学先で具体的に何をしたいのか不明。	(11) なぜ志望分野のある日本の大学あるいは海外の他大学ではダメなのか不明。
(3) 多くの応募者は、留学が人生の目的かのように書いてきて、留学を通じた将来の目標やビジョンも無いから説得力に欠ける。	(12) 留学先で自分ならではの寄与できる魅力が不明。
(4) 留学の志望理由に、専攻分野に興味があるという漠然とした理由だけ書いていて、他の応募者も同じような志望理由を書いていることを知らない。	(13) 留学をした直後のシナリオや将来性が描けていない。
(5) 留学の志望理由に、過去の切欠や経緯のことばかり書いてくる：同じ専攻を希望する人は、類似の経験や興味を持って応募してきていることに気付いていない。	(14) 応募者の 20－30 年後の将来の目標やゴールが見えない。
(6) 留学計画では、自分が一生懸命勉強すること、先生から学ぶことばかり書いていて、自分なりの独自の取組方や成果の出し方などが示されていない。	(15) 志望者本人の特徴・長所・短所などの自己分析や自己評価ができていない。
(7) 教科科目の成績評価以外で、応募者の差別	(16) 他応募者をおして、なぜ自分が選ばなければならないのか不明。
	(17) チームとして協働・協調できるか疑問。
	(18) 応募者の全員が「一生懸命やります」とは口にするものの、そもそも迷いがなく心から留学をしたいのか、あるいは、奨学金を

化は、過去の栄光や現在に起因するものではなく、期待できる将来の成果（即ち、現時点での目的・目標と想像できる成果や社会的恩益）であることが分かっていない。

- (8) 客観的な参考資料の参照や調査もなしに、思い込みで「日本は遅れていて」あるいは「アメリカは進んでいて」、「世界で一流の大学に応募するから」と書いてきて、留学さえすれば先進的なことをしていると思いついて入っている。（日本が先進国であることを忘れている）
- (9) 今の時代にして、事前に大学や学科、あるいは、大学教授と連絡や相談もせずに、留学の応募をしようとしている。あるいは、留学の斡旋会社や保護者に任せっぱなしで、主体性をもって自分で応募や手続きをしようとしていない。

心から欲しているのか疑問。

- (19) 卒業するまでの留学経費や奨学金の総額が1千万円～2千万円相当になる準備をしてきたとは思えない。
- (20) 留学の計画書や奨学金志望理由書は、「将来のあなた」になるための計画提示で、小論文執筆や面接は、その計画に対する理解と協力の依頼であることが分かっていないで、興味本位で応募した、あるいは、他人ごとのように感じるところがある。
- (21) 奨学金審査経験者を魅惑させるどころか、異文化、着実性、長所短所の把握、情熱などの安心材料の欠如
- (22) その他

他国の応募者との比較ができないところは残念ではあるものの、これらは問題解決の糸口となる重要な定性的な評価データだと言える。そこで、今回はこの評価データを出発点として、問題の改善・向上を図ることとした。

2.2. 留学の相談・指導を担当する教職員からの問題意識の所在

他方、2018年度と2019年度に開催された教職員向け Workshop では、中学・高校・大学あるいは地方自治体の教育委員会で、留学の相談・指導あるいは留学促進の担当をしている教職員が参加していて、その際に、留学志望者である生徒・学生の小論文や面接に関する指導状況や問題点について、表 2.1 に示された回答が寄せられた。

表 2.1 留学相談・留学指導担当教職員の留学応募者・奨学金応募者への指導内容

(1) 具体的に何をしたいのか聞き、具体的な応募書類になるように書かせるようにしている	すように指導している
(2) 小論文における効果的な文章の執筆テクニックを教えている	(6) 面接時の入室時の挨拶や荷物の置き方や腰掛け方などを指導している
(3) 面接時の効果的な喋り方やジェスチャーを指導している	(7) 面接時の様々の質問対策
(4) 応募学生の語彙や効果的な接頭語・接続詞・語彙を教えている	(8) 生徒が執筆する留学計画書・奨学金応募理由書に対して教員による推薦書と評価書の内容について裏付け・連動させるように執筆指導をしている
(5) 面接時にハキハキ返答をしたり、端的に話	(9) その他

表 2.2 留学担当教職員が Workshop から学びたいこと・知りたいこと

(1) 具体的に留学指導する上での大学に関する情報（日本で言えば受験紹介誌や赤本のような情報）が少ないので教えて欲しい	(6) 成績に対する最低点や最低基準
(2) 何を志望するときに、どのような学科良いのか教えて欲しい	(7) クラブ活動や課外活動への評価の程度
	(8) 推薦書の依頼の仕方と執筆方法
	(9) 推薦書と評価報告書の違い
	(10) 小論文執筆に役立つ文章テクニック

(3) 留学志望者のモチベーションの上げ方や維持の仕方	(11) 留学費用の掛かり具合
(4) 審査員の具体的な質問内容と評価のポイントあるいは模範解答	(12) 留学先での奨学金・授業料免除の可能性
(5) 奨学金の採択人数と評価基準	(13) 帰国時の就職活動方法
	(14) その他

ここで表 1.1 の奨学金審査経験者が取り上げている日本人応募者の課題を考察してみると、留学志望者の(1-1)主体性と当事者意識の欠如、(1-2)留学計画の具体性欠如、(1-3)将来像やビジョンの欠如、(1-4)明確な根拠や参照資料も無い理由付け、(1-5)自己分析と自分の活かし方・貢献の仕方への発想の貧困さ、(1-6)自分の短所に対する留学のリスク管理の意識欠如、(1-7)高額な留学資金・奨学金に対する相応の準備不足、(1-8)奨学金審査経験者を安心させる材料の欠如などが挙げられている。端的にまとめると、応募者が目指す留学から具体的に期待できることが乏しく、留学や応募者を通して見えてくる将来性の不透明さや応募者に対する不安材料が、投資に見合う判断ができず、評価点が下がり合格・採用が見送られることが多いということになる。つまり、高く評価されるポイントは、留学から形成される魅力的な将来の可能性に向かって主体性と責任を持って臨むことの是非で評価が分かれていると言っても過言ではない。

それに対して、表 2.1 ならびに表 2.2 における応募者の現場指導者の立場に教職員の指導内容や指導の矛先は、応募者である生徒たちに留学応募の合格や奨学金に採用させてあげるためのテクニックの提供や不安要素の払拭に重点が置かれているとまとめることができる。それは、応募者を支援・指導する立場としては、応募者が主体性をもって臨む留学や奨学金応募であるから、これらの留学相談・留学指導の担当をしている教職員の立場では、心情的に不思議なことではない。しかし、テクニックの提供や応募者の不安要素を払拭するだけでは、応募者による「魅力的な将来の可能性に向かって主体性と責任を持って臨むこと」の実現、あるいは、奨学金審査経験者が認識している課題の解決には直接結びついていないことになり、応募者の課題解決すべき方向と、現場の留学の相談・指導を担当している教職員の意識では、問題解決のレイヤーがずれていることが分かる。

このことを留学指導担当教職員との意見交換をした結果、学校や大学では、人生設計や将来のビジョンを扱う教育の時間や機会はなく、キャリアカウンセラーや留学相談のカウンセラーなどの個別相談に依存しているとのことであった。また、個別相談であることから、集団規模で生徒・学生の人生設計や将来のビジョンを踏まえた留学計画書や奨学金応募理由書の執筆の質的向上を図ることは難しく、「キャリアと生涯設計ならびに将来計画」などの授業を中学・高校から組みこまない限り、日本人の海外留学を促進させたい日本政府にとってはハードルの高い課題と言える。

また、カリキュラムや受験などの制約により、教育の現場に人生をしっかり俯瞰して自己分析と生涯設計を取りまとめる時間が持てていないことは、明るく楽しい未来が描けずにモチベーションの低いまま教育を実施していることになり、青少年育成において大きな課題だと言え、見直しが必要であると考えられる。

3. 将来設計とビジョン作りの重要性

奨学金審査経験者からみて、魅力ある留学応募者や奨学金応募者を養成することは、留学する前の時点からの人材育成を必要とされていることを意味しており、中高生あるいは大学生とはいえ、留学計画や奨学金応募のための小論文執筆や面接、プレゼンテーションなどは、現代のビジネス的に極端な表現に置き換えると、留学をビジネス投資と考えてみたとき、留学を通して成長・発展していく応募者の人生をアピールすること、あるいは、将来像に対する理解・共感を得ながら投資のアピールをしていることになり、留学という魅力的な個人事業のビジネスリーダーを求められていると言った方が現代人には伝わりやすいと考えられる。そこで、今回はビジネス界のリーダーシップモデルを参考に、表 1.1 に見られる課題の要因分析と解決のためのカリキュラム編成を試みることにした。

3.1 ビジネス界の EQ・リーダーシップ研修に見る思考能力の醸成

ビジネス界におけるビジネスリーダーの養成あるいは人格形成などは、かなりのノウハウが蓄積されており、昨今の昇進研修やチームを率いるマネージャーなどへの人事研修では、MBTI (Myers-Briggs Type Indicator)、mgram ならびに EQ (Emotional Quotient)などを受講することが必修となっていて、ビジネスリーダーや経営者育成のための高額なセミナーやイベントでも頻繁に引き合いに出されている。但し、これらの研修やノウハウは、自己分析や成長・発展のモデル軸として用いられていて、個々人の性格の診断や人事評価をするものではないことが前提となっている。

この MBTI ならびに mgram の原点は 19 世紀の心理学者 Carl Gustav JUNG が提唱した人間の心理を外交的と内向的に分けるとともに、人間だけが顕著に持つ 4 つの思考能力とする思考・感情・感覚・直観のモデルがもととなった King, Warrior, Magician, and Lover の 4 つの人格モデルが原点となって 8 種類あるいは 16 種類の個性や性格モデルを指標軸とした性格分析や人格育成に使われることが多い。

また、人の社交性と思考能力のモデル傾向から、自己分析や対人関係における個々のコミュニケーションやリーダーシップのスタイルをステレオタイプとした自己啓発の演習モデルとして様々な研修で使われている。特に、これらモデルは、ビジネスリーダー養成や経営者育成のリーダーシップを扱う高額な参加費を必要とするワークショップでは、Carl Gustav JUNG のこれらの分類が頻繁に引用され、これらのセミナーやワークショップにおけるこれらの 4 つの元型は、現代の脳科学などにおいて動物の中で人間が独自に発展させた思考能力として Creative Intelligence, Operational Intelligence, Analytical Intelligence, and Relational Intelligence などとして参照されることが多い。この考え方は、自分の思考形態や発想傾向の得意・不得意を分析することに役立つと共に、目指すべき思考形態や発想傾向のモデル分析に役立つ。具体的には、これらの 4 つの元型の人格に見られるステレオタイプで、King は A.創造的なビジョン・創造力・信念の形成に、Warrior は B.勇気・自信・信頼や継続力の醸成に、Magician

は C.興味や好奇心と分析力の醸成に、Lover は D.共感・献身・関係力の醸成に役立ち能力を持っていて、また、他人はこれらの能力に共感することができると Robert WALTERS や James SKINNER のセミナーでは解釈されていることが多い。

3.2 現在の目的・目標によって行動するパラダイムからの解放する ADLER モデル

実際の社会のリーダー育成や自己啓発で注目を浴びた心理学者は、Alfred ADLER である。実は、Carl Gustav JUNG と Alfred ADLER は、人間の言動には無意識が原動力となる「欲望」や「自我」と呼ばれる心理的な要因があることを提唱した Sigmund FREUD を師匠としている。Alfred ADLER は、「人の悩みはすべて対人関係にある」そして「人はまず行動をとり、過去の行動に理由を求める」という個人心理学の分野を提唱するとともに、「人は原因によって行動するのではなく、現在の目的によって行動する」という、人をパラダイムからの解放することによる自己啓発の可能性を示していた。

多くの青少年の場合、進路やキャリアを考える際に、考える軸や評価基準が分からず思い悩むことが多い。しかし、Alfred ADLER の考え方を、留学に置き換えて考えれば、過去や現在に要因を求めても、経験の受け止め方によって、現時点での目的・目標を定めれば自覚と行動が伴うので、留学を通じて見えてくる自分の将来像や将来の目標などのビジョンを定めることが重要であると解釈することができる。無論、その目標に対して自分の長所・短所などの自己分析や、自己啓発のために努力し続けること、そして、周囲の理解や協力を貰うための共感力や献身的な姿勢も重要となってくる。その時に、参考になるのが Carl Gustav JUNG から派生する Peter SALAVOY and John MAYER の EQ モデルで、人間の言動は、そのモチベーションとなる目標に対して、自分の情動傾向を分析と把握するとともに、目標達成に向けた感情のマネジメントと活用することで自己実現・自己満足を図るとされている。

具体的には、EQ のコンピデンシー（行動特性）には、①感情リテラシー、②自己パターンの認識、③結果を見据えた思考、④感情のナビゲート、⑤内発的なモチベーション、⑥楽観性の発揮、⑦共感力の活用、⑧ノーブルゴールの追及の 8 種類がある。

3.3 実際の成功者から見るリーダーシップスキルズと人格形成

リーダーシップのモデル研究は、前述の心理学的なアプローチとは別に、政治や財界、様々なビジネスから学者などに見られる「実際の成功者」たちを分析するアプローチがあり、その代表ともいえる Steven R. COVEY は、アメリカ合衆国の建国 200 周年記念に向け、1776 年以降にアメリカで出版された政治やビジネス・学者に始まる様々な「成功者」に関する文献調査を行い、「How to succeed with people (1971)」では、これらの「成功者」の共通点として、近年の 50 年間は知識や技術などの個性に重きがおかれていたのに対して、それ以前のアメリカの歴史上、最初の 150 年間に出版された文献では、誠意・謙虚・勇気・忍耐・勤勉などの人格的な部分に重点がおかれて書かれていることが多く、長期にわたる真の成功は人格を磨くための具体的な

行動指針や思考指針などの意識改革や習慣の向上をさせることが重要であると論じている。この本が出版された後は、各界のリーダーに見る成功者の生活形態や発想・習慣に関するビジネス書が多く出版されることになったのは、この著書が皮切りとされている。後に、Steven R. COVEY は「Seven habits of highly effective person (1989)」では、人格形成の自己啓発法として7つ種類にまとめている。

表 3.1 Steven R. COVEY による7種類の習慣

私的成功の習慣 第1の習慣：主体的である 第2の習慣：終わりを思い描くことから始める 第3の習慣：最優先事項を優先する	公的成功の習慣 第4の習慣：Win-Win を考える 第5の習慣：まず理解に徹し、そして理解される 第6の習慣：シナジーを創り出す
再新再生の習慣 第7の習慣：刃を研ぐ	

この COBEY モデルを留学に置き換えて考えると、第1の習慣では、誰のためでもない、自分のために貪欲な準備をする。第2の習慣では、留学の先にある将来の成功や人生の終わりを思い描いて留学が準備されること、第3の習慣では、将来の成功や人生の終わりの目的・目標に向けて、最優先事項を分析して、課題に取り組むという、自分の成功のための準備が見られることが重要であることが前半では重要であるということになる。また、自分の人生の成功のためには、第4の習慣として、社会における win-win な関係も重要で、家族や留学先を含めた、自分の理解者・協力者などのいわゆるステークホルダーとの相乗効果も考え始めること、そして、第5の習慣として、自分とは違う立場にある人たちの理解に徹し、第6の習慣としては、自分の人生の目的や将来の目標について理解してもらうことから、チームとしての協力関係を作るシナジーや雰囲気を作り出し、第7の習慣として、成長していくサイクルを作り出すという、ある意味で、成功者に見るリーダーシップの習慣の傾向を、留学志望者に当てはめて考えることができる。

3.4 JUNG-ADLER(EQ)-COVEY モデルと奨学金応募者に求められるコンピデンシーの対比

JUNG と ADLER (EQ)ならびに COVEY の夫々のモデルにおける共通項は、具体的な将来やゴールを思い描くことによるモチベーションの高揚と主体性で、ADLER(EQ)と COVEY のモデルでは、主体的に関わり、終わりを思い描くことから始めるという点では完全に一致している。また、JUNG のモデルにおいても、4つの元型のうち、King に見る人間の創造的なビジョンが他の人格モデルにひと際影響をあたえる大きさは他の人格モデルの比ではない。一方、表 1.1 に掲げた日本人の奨学金応募者の短所のリストは、奨学金審査経験者から見た奨学金応募者に求めているコンピデンシーを表わしていると言える。

そこで、作業チームは、表 1.1 に掲げた各項目について、JUNG-ADLER-COVEY のモデルに対比させて、それぞれのモデルで求められるコンピデンシー（行動特性）を洗い出すことにした。但し、表 1.1 に掲げた項目は類似内容が多いため、ここでは簡

単化のため(1-1)～(1-8)に纏めた項目に代えて対比することとした。(表 4.1 参照)

表 4.1 JUNG-ADLER(EQ)-COVEY モデル対比における奨学金応募者に求められるコンピテンシー

日本人の奨学金応募者の課題	必要とされるコンピテンシータイプ		
	JUNG モデル	EQ モデル	COVEY モデル
(1-1) 主体性と当事者意識の欠如	AB	④⑤⑧	①
(1-2) 留学計画の具体性欠如	AC	③⑤⑦⑧	①②③
(1-3) 将来像やビジョンの欠如	A	③⑤⑥⑦⑧	①②
(1-4) 明確な根拠や参照資料も無い理由付け	AC	②③⑧	①②③④
(1-5) 自己分析と自分の活かし方・貢献の仕方への発想の貧困さ	ACD	①②③④⑤⑦⑧	①②③④⑤⑥
(1-6) 自分の短所に対する留学のリスク管理の意識欠如	ABCD	①②③④⑤⑧	①②③⑤
(1-7) 高額な留学資金・奨学金に対する相応の準備不足	AC	②③④⑤⑥⑦⑧	①②③④⑤⑥
(1-8) 奨学金審査経験者を安心させる材料の欠如	ABCD	②③④⑤⑥⑦⑧	①②③④⑤
各コンピテンシーの集計	A:8 C:6 B:3 D:3	①:2 ④:5 ⑦:5 ②:5 ⑤:7 ⑧:8 ③:7 ⑥:3	①:8 ④:4 ②:7 ⑤:4 ③:6 ⑥:2

表 4.1 におけるコンピテンシーの集計で、一番特徴的なのは、JUNG モデルにおいては「A.創造的なビジョン・創造力・信念の形成」のカウントが 8 件と一番多く、ADLER(EQ)モデルでは「⑧ノーブルゴールの追及」の 8 件について、「③結果を見据えた思考」と「⑤内発的なモチベーション」の 7 件、そして、COVEY モデルでは「①第 1 の習慣：主体的である」の 8 件と、「②第 2 の習慣：終わりを思い描くことから始める」の 7 件で、いずれのモデルにおいても、奨学金審査経験者は、応募者の主体性と将来のビジョンのコンピテンシーを一番求めている、同様に、この対比分析を表 1.1 に掲げた項目で行うと、一段と将来のビジョンが求められていることが分かる。

このことから、日本人の留学応募者あるいは奨学金応募者の小論文執筆や面接内容は、主体性を持って将来のビジョンや計画を描き、審査する者に対して分かり易く共感できるような説明・説得する練習や訓練が必要であることが分かる。

4. 留学準備のワークショップの設計

前項の考察から、今回手がけた留学準備の Workshop は、時間はかかっても、まずは、自ら生涯のビジョンや計画を決め、その人生における自分の役目や役割のアイデンティティを明確にする中で、漠然と想像していた留学の計画について、「なぜ、自分の人生で留学が必要なのか？」を明確な言葉にしてシナリオを作り、そして、その生涯事業の可能性を実現させるために必要な留学についてビジネス投資をして貰うイメージで、留学の価値や意義を分析するワークショップを組むこととした。

4. 10ne-day Workshop のシナリオ

今回の留学志望者向けの One-Day Workshop の狙いは、留学志望者同士、留学の目的や内容が違っても、普段の学校生活では孤立しがちな留学志望者が、お互いの境遇の共有により短時間で心を開き、お互いの長所・短所を学び合いながら、考えることや言葉にして表わす機会が少ない将来のことを遠慮なく話し合い刺激し合うことで明確化していくことである。

また、Workshop の限られた時間内であっても、分かり易い言葉とアピールの強い表現で明確化していくために、Workshop の最後には、自分の将来のビジョンと計画を人前で宣言する発表時間を設けることで、将来の計画や留学の成功イメージを志望者の記憶や無意識に落とし込み、Workshop 後の留学準備が着実に進む高い意識レベルへ導く勘案も施した。

一方、生徒・学生の多くは、進学と漠然とした職業という狭い視点でしか将来を考えたことがない。しかし、生涯に渡り人生設計をするにあたっては、多岐にわたる楽しい人生が待っていなければ、明るい将来ビジョンは作れないし、自信も湧いてこない。そこで、人生設計や将来の目標を策定していく上で、人生が辛い勉強と義務的な労働だけではなく、自分らしく楽しい人生設計や将来の目標を策定できるように、表 5.1a や表 5.1b に掲げるような、多岐に渡り人生設計や将来の自己実現を考えるための時間と参考資料を用意した。

表 5.1 Workshop 前の下準備 1：各自が理想的とする人生設計とアイデンティティーのネーミング

(a)高校生版	(b)大学生・社会人版
(1) 子供の頃の「夢の職業」「憧れの仕事」	1. 将来の成功したいキャリア・役職
(2) 将来の成功したいキャリア・役職やそのための教育・資格	2. 将来の成功したい教育・資格
(3) 将来築きたい理想の家庭と家族のイメージと時系列プラン	3. 将来築きたい理想のパートナー・家庭と家族
(4) 将来 40 歳と 60 歳までに獲得したい理想の収入と貯金・財産・家	4. 40 歳と 60 歳までに獲得したい理想の収入と貯金・財産・家
(5) 将来達成したい趣味・レジャー・楽しみ	5. 将来達成したい趣味・レジャー・楽しみ
	6. ボランティア・老後の趣味

表 5.2 Workshop 前の下準備 2：各自の留学計画に関する設問

(1) (安心) まず、応募書類が、興味本位ではなく、主体的に力強く決断した上での留学計画と人生設計の一部であることを明示する。	(7) (安心) 留学直後の予定やキャリア形成プランが示されている。
(2) (興味) 将来なりたい自分に成れたら楽しい嬉しいだろうと思う将来設計や将来目標を明示する。	(8) (留学・奨学金の応募にあたり、他者ではなく、自分が採用されるべき理由が書かれている。)
(3) (共感) 将来の目標が、社会問題を解決・改善する専門的アイデンティティーとして明示する。	(9) (信用) その将来の人生設計や将来の目標のために、これまでどんなことをしてきたのか、また、留学に向けた準備をどのように進めてきたのかが示されている。
(4) (安心) 自分の人生設計や将来性の目標に対して、志望する専門分野を専攻する必要性や必要とする知見や技術の具体的な内容や水準を明示し、就学の段取りが理解されていることを示す。	(10) (信用) 自分の長所・短所の自己分析とリスクを自覚した上での留学への心構えができています。
(5) (信用) 志望する大学・研究室が明確で、入念な事前調査や特徴が示されている。	(11) (信頼) 留学先中に、自分独自の寄与・貢献できる準備ができています。
(6) (納得) 他の類似の大学や研究室ではなく、志望先である理由が示されている	(12) (信頼) 自分の将来像と、社会貢献できるイメージが示されている。

また、多くの生徒・学生は、各自の「性格分析」や「思考×言動」の傾向分析する機会を持った経験が無いことから、多くの企業研修では既に通例となっている mgram 分析や EQ 検査を Workshop に向けて提供することにより、自分の性格や思考形態を客観的に分析・理解し、言葉で自己表現できる機会を提供した。

4.2 留学準備 Workshop の流れ

(1) 事前課題

Workshop に参加者の自己分析のために、事前に次の3つの課題を提示した。

- ① mgram 分析と EQ 検査：生涯計画と留学のことを思い描きながら指定用紙と指定 URL より実施。
- ② 課題シート：留学志望者は Workshop の前日までに表 5.1 と表 5.2 に示している「各自が理想的とする人生設計に関する設問」と「各自の留学計画に関する設問」について、解説ビデオを見ながら準備して提出する。
- ③ 課題ビデオレター：留学志望者は、前述の課題シートをもとに、留学志望のアピールのためのビデオレター（約 1 分）を制作して提出する。

課題ビデオは、表 6.1 に示す基準に従い奨学金審査経験者が評価を行い、Workshop 当日の修了式のときに修了証ともに返却される。

表 6.1 留学志望理由の 1 分スピーチに対する評価基準（可否境界域：B-C、推定安全圏：B+）

評価	評価 合計	国内奨学金 推定可否	評価項目
S	8pts	推定安全圏	1pt: 自分の特技と魅力ある独自の取組が明示されている
A	7pts	推定安全圏	1pt: 具体的なキャリア計画と社会貢献の可能性が述べられている
B	6pts	可否境界域	1pt: 人生計画あるいは将来の目標と留学の必要性が明示されている
C	5pts	可否境界域	1pt: 留学後のキャリア計画が明示されている
D	4pts		1pt: 志望先の大学・教授の特徴が調べられている。
E	3pts		1pt: 希望専門を専攻する理由が明示されている
F	2pts		1pt: 希望する専門分野や専攻が明示されている
G	1pt		1pt: 留学希望が明示されている

(2) Workshop 当日の段取り

- ① 参加者は、Workshop 全日の流れと留学準備上よくある間違いや注意点について説明を受けるとともに、課題のビデオレターに対する評価点結果も示される。近くに座っている参加者は、ほぼ同水準の評価点になっていて、近くで話し合うと、事前課題で同程度のハードルで苦労したことを分かち合うことができるように設計されている。
- ② 午前中は、留学計画の前に、A.キャリア、B.収入・財産、C.居住場所・家族、D.趣味・レジャー、E.教育・資格、F.家族構成、G.退職後のプラン、そもそもの人生設計や将来の目標について「未来予想パネル」に清書しなす。（資料 7.1-7.2）
- ③ 同じ留学志望者ではあるが、当日出会ったばかりの見ず知らずのパートナーと一緒に、事前に提出した課題シートあるいは課題のビデオレターを共有し、お互い同士で感想や印象・問題点を共有して、相互に長所・短所の評価のコ

メントを出し合う。(事前課題の難しさの共有と共感による心の開示を期待)

- ④ **Workshop** の終わりには、参加者全員の前にあるステージに立ち、自分の留学計画と将来の展望に関する宣誓を日本語と英語により原稿を読むこと無しに大声ですることが提示される。(事前課題の他に、パートナーとの共有・共感直後に、参加者全員の前で宣誓するという、新たな課題への興奮を喚起する)
- ⑤ 参加者は、表 6.1 に示す当日用の課題シートに従い、もっと歯切れが良く、心に響く発表原稿をお互いに作り・提案し合いながら、2時間程度で、発表原稿を作り上げ、発表の練習も行う。

(EQ 効果) 発表原稿考える時には、率直な意見と積極的なアドバイスを相互に交さないと、自分の本番の発表も、相手の発表もうまく行かない。また、他人の原稿を見ることで、現行の良し悪しが客観的に学ぶこともできる。お互いのレベルが分かる。

午前中のブリーフィングや作業概要の説明時間にゆとりがある場合は、午後の本番練習に入る前の午前中に、数回のローテーションを行い、短時間でのフィードバックの入れ方の練習を行う。

- ⑥ 途中、事前訓練されたメンターがグループワークを巡回し、発表原稿制作への助言と時間内に終わらせるための進捗管理と参加者の緊迫感の維持を管理して、最終発表へ向けたクライマックスを演出する。参加者は、お互い励まし合いながら、相互に様々なフィードバックを入れ合い、発表の成功に向けてのイメージ作りと発表の練習をする。

(2018年度と2019年度の **Workshop** では英語を話者とする外国人留学生もメンターに投入したが、2020年度については新型コロナウイルス対策のため、オンライン開催となり、メンターは日本語対応の身となり、オンライン会議上でのワークアウトとなった。)

- ⑦ 最終発表は、真剣な雰囲気の中で緊張の中、グループ毎に一緒にステージに立ち、一人が発表するときには他者が傍に立って応援し、人前での発表という試練をパートナーと一緒に乗り切るシナリオを作る(資料 7.3)。セリフを忘れ発表が中断したら、発表はやり直しとなり、ある種の緊張と困難を設定する。聴衆側の参加者は、拍手で出場者を迎え、出場者の自己紹介の時には、発表者を温かく歓迎する雰囲気作りや声がけに協力する。
- ⑧ 発表直後には、拍手喝さいで終わり、主催者側が即時に合格を伝え、各自が自分の短時間での成長と発表の成功を祝福し合う。

(EQ 効果) 応募段階の時から、漠然とした留学と将来のイメージについて試行錯誤しながら、恥ずかしいながらも、自分の将来のことについて、普段に無いプレッシャーと緊張の中、楽しい将来が待っている筈の留学計画を練ること、そして、正解のない自分の考えや将来計画について、力いっぱい込めて発表したことが成功体験となって着実に記憶に刻み込みこまれ、自信が付く瞬間である。

- ⑨ 発表の直後には、Workshop 前に提出したビデオレターの評価と、Workshop の最終発表で行った宣誓形式の発表評価を印した修了証（資料 7.4）を渡す。この修了証には、Workshop 前に提出したビデオの評価点（Before）とワークショップの終わりに成果発表した評価点（After）が記されている。

5. One-day Workshop の成果と考察

- (1) この 3 年間に渡る留学準備ワークショップに参加した留学志望者は、中学生から社会人（40 歳以下）までの 311 名であった。事前課題で推定安全圏にあった志望者はゼロであったのに対して、当日のワークショップ終了時に推定安全圏に入った参加者は 17 名いた。
- (2) この One-day Workshop の成果は、スタッフや教職員による個別相談や個別指導をしなかったことを考えると、集団としては、一人当たり平均 2.16 ポイントという顕著な向上成果が見られた（最高 3 ポイントアップ、最低 1 ポイント、標準偏差：0.392）。
- (3) 表 8.1 は、奨学金審査経験者が、Workshop の成果発表で、推定安全圏 B 以上の評価を受けた参加者の発表を見たときの留学志望者の感想をまとめたものである。

表 8.1 推定安全圏 B+以上の評価を受けた発表を見たときの参加した生徒・学生の感想

【A.応募時の評価項目】	
(1) 留学したい強い意思や希望が示されている	(5) 将来について自信に溢れているように見えた
(2) 志望先の理由や他の進学時の比較が示されている	(6) 人情深く、人のことを大切にしているタイプに見えた
(3) 留学で修得した専門分野を活かす具体的なビジョンやアプローチが示されている	(7) 目標に向かって楽しそうに話しているように見えた
(4) 留学で修得した専門分野を活かす独自の視点が示されている	(8) 人からは信望があるタイプのように見えた
(5) 留学で修得した専門分野を活かす社会の貢献や未来への希望が感じられる	(9) 目標達成までの粘り強さがあるように見えた
(6) 留学で修得する必要がある専門科目・専門技術や水準が具体的に示されている	(10) 着実な安定感や緻密性が伺えた
(7) 留学から将来に向けた信念やアイデンティティーが感じられる	【C.伝わりやすい表現形態】
【B.伝わりやすい共感表現】	(1) 原稿が暗記されているだけでなく、心底からの信念で語り掛けている
(1) 見知らぬ人でも、親しみやすく、語り掛けるように喋っていた	(2) 自分の言葉で落とし込みができています
(2) 揺るがぬ信念とビジョンをもって喋っているように見えた	(3) 親しみやすい喋る速さと、分かり易い抑揚や間が取られているが自然な喋り
(3) この人なら安心して頼れる・任せられるように見えた	(4) 親しみやすいアイコンタクトや相槌があり、見ている、思わずうなずいてしまう
(4) 興味と好奇心の塊で、興味のあることには、かなり夢中になるタイプに見えた	(5) 留学や将来のイメージが自分で自分の目に浮かぶように語っている
	(6) 自然に引き込まれるような表現・プレゼンのジェスチャーや身動きになっていた

- (4) 従前の留学相談や留学指導では、一過性の相談や指導になりがちであったのに対

して、今回の Workshop、特に 3 年度目の Workshop では、コロナ禍の対応のため、オンライン教材の整備をすることができ、いくつかの模範モデルを紹介することが可能となったため、成功・失敗の事例紹介がしやすくなり、また、Workshop 会場の場所に囚われないリモート支援も可能となった。

- (5) 留学志望者の参加者からは、人生設計や将来のビジョン作りにもっと時間を割きたいというリクエストが圧倒的であった。事実、この部分の Workshop の時間は不足していて、再参加の生徒・学生がいたり、数校から招聘があった。
- (6) 海外の大学を調査するにあたり、大学の水準を見極める方法や留学経費に関する具体的な資料を求める声も聴かれた。
- (7) 留学志望者は、留学や将来設計を考える上で、一般の学生より様々な悩みを抱えていて孤立しがちである。今回の Workshop では、同じ留学志望をしている者同士の境遇の共有や、相互にフィードバックをすることにより、積極的な自己アピールや演習パートナーからのフィードバックにより客観的な表現や自己能力の気付きがあるように設計していた。また、最終成果発表時には、留学準備から見えてくる自分の将来に対する成功のイメージ共有について、ある程度の緊張と真剣な雰囲気の中で発表することによる達成感などの EQ 的な演出や設計を念入りにしたもの、これらの EQ 効果を評価する準備までには至らなかった。
- (8) 留学志望の参加者で、Workshop 中の推定安全圏に入った留学志望の参加者の絶対数は少なかったものの、これらの参加者は、留学や奨学金への応募直前の段階ではなく、実際の応募は半年から 1 年以上先に予定されていた留学志望者であることから、一定の成果や今後の効果に期待できると考えられる。

6. まとめ

留学計画策定時あるいは奨学金応募時の小論文執筆や面接では、審査内容の守秘義務から、これらの問題が公開されるとはなかったが、今回は、実際の留学志望者を集めた貴重な Workshop の開催機会を得たことにより、ある程度の問題点を明確にすることができたことは顕著な成果であったと思われる。

また、これまでの学校や大学における留学相談や留学指導では、留学だけに焦点が当てられた小論文執筆や面接に対する指導になっていたのに対して、今回の奨学金審査経験者の情報共有により、本来の留学相談や留学指導は、まず個々人のキャリアや人生設計と、将来の目標やビジョンを簡潔に具体化した上で、留学志望者の人生の位置づけとしての留学の必然性を考えることにより、生徒や学生である留学志望者にとってもストーリー展開がしやすくなり、短時間の Workshop であっても、効果的で説得力ある小論文や面接用のエピソードを認めやすくなることが分かった。

また、これらの Workshop では、半数以上の参加者が 2 ポイント以上の質的向上がみられた。従来の留学準備の相談や指導は、学校の教職員が一人一人の志望者の個別相談で執筆指導していたことに比べて、かなり効率が図られた集団指導が可能であることも分かった。

今回の Workshop では、留学計画策定時あるいは奨学金応募時の小論文策定や面接対策のコンテンツ部分の質的向上は図られ、心構えや感情面でのワークショップデザインをしたものの、これらの効果を定量的あるいは客観的に測定することまでには至らなかった。今後は、これらの効果測定も兼ねた研究調査が望まれるところではある。

謝辞

本事業は、2018 年度から 2020 年度にかけて実施された文部科学省委託事業「日本人の海外留学促進事業」における Workshop で企画・開催にあたり、サニーサイドアップ株式会社、留学生教育学会（JAISE）、一般社団法人海外留学協議会（JAOS）ならびに McKEN 株式会社より、親身なるご支援・ご協力を頂きました。

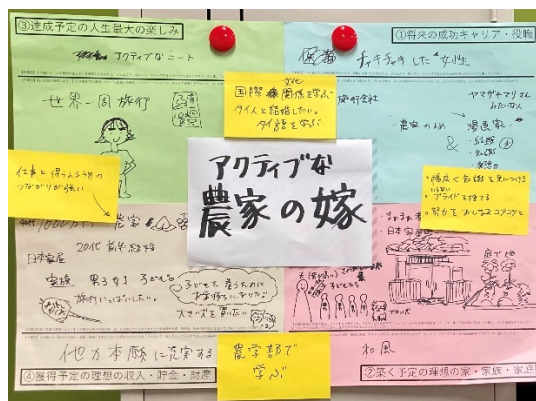
また、本事業の調査にあたり、現場の貴重なフィードバックやご意見を提供して頂いた教職員ならびに奨学金審査経験者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

最後に、大阪市水都国際高等学校と大阪女学院におけるそれぞれ IB コースあるいは国際プログラムコースの生徒の皆さん、そして、模擬国連(Model UN, Japan)の有志の生徒・学生の皆さんには、本事業の教材制作にあたり、多大なるご協力を頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます。

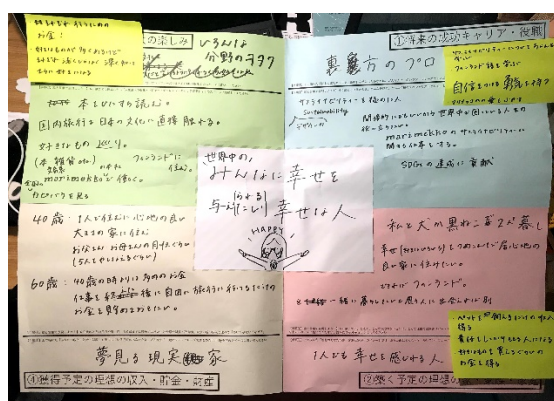
参考文献

1. Robert Moore, and Doug Gillette, "King, Warrior, Magician, Lover: Rediscovering the Archetypes of the Mature Masculine", HarperOne, 1990.
2. Stephen R. Covey, "How to Succeed With People", Deseret Book, 1971.
3. Peter Salovey, and John D. Mayer, "Emotional intelligence", Sage, 1990.
4. Four Corners Academy for Global Citizens, 「グローバルな留学を考える集中ワークショップ：Textbook」, 2019.
5. Four Corners Academy for Global Citizens, 「グローバルな留学を考える集中ワークショップ：Workbook」, 2019.
6. Four Corners Academy for Global Citizens, 「グローバルな留学を考える集中ワークショップ：将来予想パネルシート」, 2019.
7. James Skinner, “成功の 9 ステップ”, 幻冬舎, 2004.
8. Joshua FREEDMAN, “Practicing Emotional Intelligence”, 6seconds, 2016.

資料 7.1 将来のビジョンと計画を策定するための「未来予想パネルシート」例 1



資料 7.2 将来のビジョンと計画を策定するための「未来予想パネルシート」例 2



資料 7.3 留学ビジョンの発表光景



資料 7.4 Workshop 修了証サンプル

